

**昭和レトロのまち・青梅での温故知新・猫町プロジェクト****—織物の産地が生み出した地域イメージ・“猫”に光をあてた観光まちづくり**

帝京大学 経済学部 観光経営学科 大下ゼミ

令和5年の新年を迎えました。令和も5年目、令和の前は私たちが生まれた平成、そしてゼミの大下先生が青春時代を謳歌していた昭和。今回は、その昭和レトロで人気を博した東京都青梅市のいまの観光まちづくりを紹介します。なぜ猫町、それは絹織物とも関係していた、これでいいのだ。

■昭和レトロなまちで知名度をあげた青梅

東京都西部を東西に横断する中央線・青梅線の名称ともなっている青梅駅。青梅市街には、かつて“青梅大映劇場”“青梅キネマ”“青梅セントラル劇場”の3つの映画館があり、そこで放映された昭和を代表する映画作品の看板が、まちなかのあちこちに点在展示され話題になりました。今もなお、青梅市を代表する観光要素の一つとして現存しています。

昭和レトロのイメージを強めたもう一つが、2003年に開館した誰もが知る人気マンガのキャラクターを生み出した赤塚不二夫の記念館でした。しかし残念なことに、2020年3月に閉館することとなりました。最寄りの青梅駅発車メロディに“ひみつのアッコちゃん”の主題歌が起用される等、時代の変わりとともに赤塚イメージが定着してきていました。天才バカボンの銅像がお出迎えしてくれていた赤塚不二夫記念館は形としては残っているものの、その中に保存されている数々の足跡を拝見できなくなってしまったのは、いささか悲しい気持ちになります。時代の移り変わりとともに、過去の歴史や足跡は薄れていくものなのでしょうか。



かつては映画看板の青梅として注目を集めていた。天才バカボンの像がなつかしい
(2014年1月：大下教授写真提供)



青梅の商店街が住吉神社に招き猫「阿弥芽猫祖神」を奉納。織物の町ならではの光景……。
(写真提供：まちづくりラボ・サルベージ)

■猫町プロジェクト(猫町にゃにゃまがり)—なぜ「ねこ」なのか

そんな青梅は周辺地域を代表する絹織物の中心地でもあったのです。路地が入り組んでいる辺りに足を踏み入れると、いたる処に「猫」をモチーフにした看板やモニュメント、猫の神様(阿弥芽猫祖神)等に出会えます。路地空間は「猫町にゃにゃまがり」と呼ばれ、猫だけにまち歩きしている観光客を招き入れているのです。

織物のまちではネズミは大敵です。そのため昔から各家には飼い猫が家族の一員としてネズミを寄せつけない役割を担っていたのです。“織物産地＝猫町”としての地域イメージを観光に活用し、東京都の地域資源発掘型実証事業を活用して、「猫町プロジェクト」として新たな展開を図っているのです。

■JR青梅線の沿線地域が連携した女子旅が話題に。。。

青梅線エリア女子旅推進委員会が定期的に開催している旅促進イベントでは、謎解きゲーム形式で沿線の立川市や青梅市などの5市の観光スポットを巡る企画や、青梅線エリアで撮られた写真を投稿するフォトコンテスト等、多様な形式の企画が行われてきました。現在は“青梅線女子旅発酵ツーリズムイベント”の企画が進行中で、発酵をテーマに日本酒やまんじゅう等だけでなく、ビールやチョコレート、パン等の発酵食もイベントで集結しています。もう一つは、青梅駅より先の奥多摩町が中心となって展開している“沿線まるごとホテルプロジェクト”です。青梅・奥多摩の大自然を体感できる旅企画で、無人駅の駅舎がフロントとなり空き家が客室に改装され訪問客をお出迎えしてくれるものです。青梅市の観光まちづくりは、レトロなものも引き出し、時代のニーズに沿った編集を加えて進化しつづけています。
(Small river 小川)



手づくり感のある路地の名称。にゃにゃまがり。



路地の足元やブロック塀の上に、何気なく猫の置物や看板が展示されている。それを探して地域を巡るのも一興である。

参考資料：まっちゃんvol.33(2006.1.1)「レトロ看板で昭和にタイムスリップの巻」も参照ください。